

眞の愛をえた人：小説

著者	坂本， 浩
雑誌名	龍南
巻	2 0 5
ページ	6 2 - 7 4
発行年	1928-02-25
その他の言語のタイトル	眞の愛をえた人：小説
URL	http://hdl.handle.net/2298/8992

眞の愛をえた人

坂 本 浩

陽はすでに一面に渡つた砂漠のはるかに遠いはてに音もなくとつぽりと入つてゐた。遠い地平線が眞紅に彩られ、幾つかの半圓を描いた明るい色が赤・淡赤・黄と次第に消えて、淺黄からすきとほるやうな青色へと轉じてゐた。

砂漠の一波ごとに一つ一つ影がくつきりといつてゐて、その波頭が殘光をあびてまぶしく光り、恰も光の波がユラユラと太陽しずむ西のはてにおしよせるやうに思はれた。幾千となく、幾萬となく、幾億となく……殆ど無限にゆらぐ波は遠い果ては小さな一つ一つの點にすぎなかつた。それは壯大と言ふよりむしろ一つの神秘的な感じを見る人に起すほどの景色であつた。心はこの自然の大にのまれてしまつて、人は唯惘然となるよりほかはなかつた。晝間の熱氣はまだ砂中に殘つてゐたが、空には風らしいものさへ見えて三四本かたまつた泉のほとり椰子の木へおとづれては微かな音をたてた。見わたす限り無限に廣い目をさえぎるものもないこの砂漠に、熱帯地方の生命とも言はれる清らかな泉をかこんで、四方に葉を繁らしたその三四本の椰子は、背景に比べてあまりに小さかつたけれども、一面に荒漠とした中に、なつかしみに似た感じを抱かせる唯一のものだつた。

ユダは唯一人くすれおちた壁に脊をもたせながら、沈みゆく夕陽をなづかしむやうにぼんやりと視線をなげて立つてゐた。ユダにとつては太陽は最愛の父であつた。晝間はそのめぐみにおぼれて、胸にわきおこる悩みも幾分忘れて時をすごすことが出来た。燒きつくやうな暑さも彼にとつては親しみをふくんだ父の威嚴としか感ぜられなかつた。いかめしかつたけれど、嚴かではあつたけれど、その裏面には慈愛みちあふれたものであつた。

陽が沈む。なつかしの父が別れをつげる。

ユダはせまりくる薄暮の中に夕暗を思つた。狂ほしいまでに悩みと淋しさの夜の大氣を思つた。そして我しらず微かな身ぶるひをおぼえざるをえなかつた。まないたの上にのせられた菜つ葉がはしからサクサクと切りきざまれるやうに、彼には一秒一秒夕暗のせまるのがはつきり感ぜられた。そして自分の身体が切りきざまれながら、暗い死の國へおちてゆくやうに思はれた。明るい光が戀しかつた。頭上に太陽が無限の愛を注ぐ時は、彼は幾分自分を忘れて、他のことにまぎれることが出来た。然し夜の暗黒が訪れて、すべてのものから唯一人きりはなされた時、ユダは泣き出したい程の淋しさにおそはれた。靜かに自分のこと、周圍のことをふりかへる時、彼の心は孤獨にしみとほつた。泣くことの出来る時はまだいい方であつた。孤獨にひしがれた魂は涙を流さない前に、もう涙を失つてしまふことがあつた。泣いて泣いて泣きあかしたなら少しはこの氣分も安まるであらうと思つても、魂はおびえて泣く餘裕すらもたなかつた。そんな時をユダは死よりも恐れた。

今日も亦陽がくれる。

そして淋しい夜がおとづれる。

彼はそう思ふと狂ほしい氣分におそはれた。

「何をぼんやりしてゐるのか？」通りすがりに一聲が強クユダの胸をさして家の中へ消えた。傳道に一日をおくりイエスのもとに歸りきたつた十二人の弟子の一人にちがひなかつた。

「ペテロかしら？」ハネかも知れない。」ユダは一種の腹立しさとねたましさを感ぜずにはおられなかつた。けれども彼はそれを外面に現はして、どなりつけたり、惡口を言つたりすることが出来なかつた。他人の態度が自分に不快な感じをあたへる時、彼はその反動を他人にもつてゆかないで、自分自身にもつていつた。他人がそんな態度をとることが悪いことだと感ずる前に、先づこんな態度を他人から示される自分があさましく感ぜられた。彼は反抗する前に自分のその時の姿を想つた。そしてあさましい感じに滿され、淋しくなり、遂には自分がいとほしくさへなつた。反抗的な態度をとつて、その人の前で公然と自分の不平をのべ、その人の態度を非難することが出来たら、ユダもこの様に惱しい氣分になることもなかつたであらう。あさましさ、淋

しさ、それから轉じたいとほしい感じが、彼にやるせない涙をさそうのであつた。彼はよく他人の羞辱をうけて泣いた。そしてその後で、あまりに自分の女々しい態度に腹をたてた。而も彼はその時ですら自分を淋しいあきらめにゆだねうるのみだつた。

ユダは晴々した男らしい性質になりたかつた。男らしく笑ひ、思ふことを男らしく言つてのけ、快活に生をつづけたいと思つた。あまりに自分が忍従と屈服の生をつづけてきたことを思ふと、流石に彼も腹がたつた。これもあまり自分が受動的な態度であるからだ。もう少しこちらから皆を呑んでかからねばならないと思ふてみることも、しばしばあつた。そんな時、彼は大膽をよそほつて、弟子たちの集つてゐる所へ出かけて行つた。冗談の一口も言ひ、親しげに仲間の肩をたたきながら、その間にわつて入つてどつかと腰を下してみるのが、皆のものは今まで楽しく語つてゐた話をやめてしまつて、無愛想な視線を彼になげて、彼をいやしむやうに眉をしがめるのが常だつた。彼はどうしても皆の中に加はりえない自分を見出さねばならなかつた。それでも彼は一生懸命に自分を皆と調和さして、美しいオーゲストラを奏でたいと努めた。彼は笑顔を作つて、その最も氣のおけないやうな一人に親しく話しかけてみた。然し、その人も彼の話をすぐ横にゐる人々にもつていつて、自分の答への同意を求めるのみで、勿論その答へはユダには返されなかつた。砂漠の眞中に立つて、わめいてみたつて、少しの反響は聞かれた。然し人々の間——而も、それらの人々は皆、ユダ自身と同じく、キリストによつて選ばれた十二人の弟子たちであつたが——には、反響は聞かれなかつた。ユダはへまをやつたと思つた。そして赤くなつた。彼には左右の人々が互に眼と眼をみかはして、惡意ある微笑をかはしあふのが感ぜられた。彼は泣きだしたい衝動にかられて、逃れるやうにその場を去るのが常だつた。人のゐない所に來ると、一度に涙がこみあげてくる。彼は、くりかへして、その時の自分を想ひ出して腹立しさと淋しさをかみしめるのだつた。

ユダは淋しかつたのだ。彼は群衆にその慰めを求めたのだ。そして、一そう徹底した孤獨をその中に見出したのみだつた。淋しさは仲間によつてさへ慰やされないので、かへつて痛切になり心を荒さますのみだつた。彼は自分自身をふりかへつて、責めるだけ責めぬいた後同じ人間であり同じキリストの弟子である彼等と自分を比較してゐた。そして彼等の幸福をうらやむと同時に彼等とあまりに一致點のない自分を疑つてみた。然し疑つても自分はやつぱりもとの自分であつた。ユダはやつぱり淋しい弱い

男であつた。

彼はその原因を尋ねた。そして、彼等の幸福も、自分の苦痛も皆、主イエスに基くことを知つた、イエスの態度はユダにのみいつも冷かであつた。ユダは主を尊敬してゐた。愛してゐた。けれどもイエスは、あまりに鏡の如き心を所有してゐた。研ぎすましたその表には、ユダの性格は最も醜くうつた。ユダは主と相對すると、はつきり自分を知ることが出来た。イエスはその姿を一寸も寛大に見てはくれなかつた。自分の性格と、イエスの鋭さのため彼はたえきれずなつて、イエスの前にあることが出来なかつた。彼は後には主と相對することすら恐れた。

それでもユダはイエスのやさしい態度を求めてゐた。やさしく自分を抱いて、その性格を真はせられた自分のために、祈つてくれることがあるなら、きつと自分の魂はイエスのやさしさの中へとけこんで、泣きだしてしまふにちがいない。そして感激して、自分が主の愛に適する人間となるように努めることを誓ふであらう。そんなことを考へてみることはあつたけれど、はかない夢は現實の前では零に等しかつた。

ユダは自分が今の苦惱に堪え得るかといふことがもつと恐ろしい問題であつた。ともすれば、すてばち的にならうとする氣持があるのを彼は知つてゐた。自己を失つた人間は恐ろしい。そのすること野獸と變りはないのである。彼は自己を忘れて狂ひまはり、主イエスも、他のにくい弟子達にも反抗する自分を想像してみることがあつた。そして、まるで罪惡でも犯したやうに感じて、あわててその感情をもみつけた。そして、その後にも彼は徹底した孤獨を見出さねばならなかつた。

「皆が幸福で一ぱいだ。たとへ如何なる苦痛、如何なる迫害にあはうとも、一日の勞を終へて歸りきて、やさしい主のねぎらひの御聲を聞けば、彼等は何ものも忘れてしまうことが出来るのだ。ペテロのやうに主の深い愛をうけたい。ヨハネのやうに主のめぐみに浴したい。否、他九人の弟子たちもどんなに主から愛せられてゐることか！ 己だけが——このイスカリオテのユダヤだけが——」。

いつのまにかすつかり夜になつてゐた。地平線がぼんやりうすあかりを帯びてたどられるのみだつた。けれども彼は家の中に

は入らなかつた。主をかこんだ幾多の弟子たちの笑聲であらう。はなやかな笑聲がドツと家の中からもれてきて、ユダの感じやすい心をおびやかした。彼は何か恐ろしいものが追つかけてでもするやうに感じて、足ばやにそこをたちさつた。仰ぐみ空には幸福の星がまたたき初めた。ユダには星さへもねたましいもののやうに感ぜられた。幸福さうに微笑んで何も惱みを感じない彼等の群の一員に加はりたいと思つた。然し、星は人間のやうに自分の幸福を誇視したり、それで不幸な人をおびやかしたりしなかつた。それだけユダには一種の憧憬に似たなつかしさを感じさせた。

彼はサクサクと砂をふむ自分の足音に感傷的になりながら、いつもの休息の場所へと歩をはこんだ。そこには清らかな泉が滾々と湧きいでて、それを保護する従者のやうに三四本の椰子がその周圍に葉を繁らしてゐた。この附近に住む人々がいつも水をくみくる所である。ここはほかから人目につきにくいし、夜には水をくみに來る人もないので、おびやかされるやうな感じもなく、ゆつくり休める場所だつた。

ユダはためいきと共にほとりに身体をなげだし、湧き出る泉を兩手でくんで幾杯となく飲みほした。しずくが指のすきまからポテポテとしたたつて一つ一つ波紋を描いて水面にくずれた星明りに薄暗りの水面に微かに影をみせてゐた。椰子がユラユラと搖れた。

ユダは空腹を満すとそこにたほれるやうに横になつて、ぼんやりと考へもなく大空を仰いだ。砂漠の夜は晴れわたつてゐた。星がちるやうに青空に光つてゐた。泣きだしたくなるほど人間界からはなれた淋しい場所だつた。風が時々椰子の葉を動かしては微かな音をたてた。夜は益々深みゆくばかりだつた。

ユダは何にも考へまいと努めた。考へても益のないことを考へることは愚かなことだと思つた。彼は靜かに眼をとじた。

ハタハタと葉ずれの音が聞えた。

その後は又死のやうな靜寂にかへつた。

しみとほるやうな孤獨の感じがヒシヒシと胸にせまてきた。

遠くで切れ切れに歌の聲が聞えて又消えていつた隊商が故郷を戀ひつつ口ずさむ歌らしかった。

「己にも故郷がある。」ユダはフトさう思つた。なつかしさが一ぱい胸にこみあげてきた。

「己が故郷を忘れてからもう何年になるだろう。その頃は父もゐた。母もゐた。己には温かい家庭があつた。」ユダの兩眼にはあつゝい涙がうかんでゐた。

「幼いころの友だちは今どうしてゐる。」

彼の眼前には一つの顔がにこやかに微笑んでうかんできた。ユダの親しい友達であるやうだ。けれど彼にはその名前さへ思ひ出せなかつた。若々しい惱みをしらない少年の顔だつた。

「どんなに淋しくてもけつして力をおとすでないぞ。おなじ南パレスチナに生をうけて、君の友として幼年時代をすごした僕がある。」ユダにはその微笑みをうかべた顔がさう言つてゐるやうに思はれた。と、よくみるとそれは小供の顔ではなくて、主イエスの温和な顔であつた。デツと見つめる無心の目はいつのまにかイエスのやさしい羊のやうな眼にかはつてゐた。ユダは初めて接する主の態度のやさしさに抱きついて泣きたいやうな感激におそはれた。けれどその瞬間、イエスの眼はおかしがたい威嚴にみち、口からは怒罵の聲が耳をつんざいてほとばしつた。

「われ汝ら十二人を選びしにあらすや、然るに汝らの一人は惡魔なり、汝、亡滅の子よ。生れざりしならば幸福ならん。」

ユダは兩手で耳をかたくとちて目をつぶつた。

それはかつての日の出来ごとだつた。

悪い悪いと知りながら私慾に眼がくらんでつい預つてゐた金を——それは僅かであつたが——使ひこんだことがあつた。その時ユダにむかつてなげつけられた呪の聲であつた。

あのやさしい温雅なイエスの口からもれた言葉としては、何といふ、いやしい、あさはかな言葉であらう！

ユダは、あの時ばかりは腹を立て、憤然として座をたつたのだつた。金をぬすむ。否、彼はぬすんだのではなかつた。どう

しても至急に入る金があつたから、一時、唯、だしかへておいてもらつて、自分の金が出来たら、元の通りなほしておこうと思つて、少しの間借りたのであつた。丁度、折あしく、イエスはユダの負擔してゐた會計をしらべた。そして、憤つた。ユダは辯解しようとしても、口がワナワナとふるえるのみで一言も言ふことが出来なかつた。ユダは『惡魔』となり『亡滅の子』となつた。『生れざりしならば幸福なる人間』とさへなつたのだつた。

ユダは思ひ起すとたえられない程、腹が立つた。あのイエスの言葉は今も尙彼の魂を貫いた。ユダは心をおちつけようと努めた。そして獨り靜かにあの時のことを考へようとした。

彼はこの事件なり、その他平常の態度なりを思ひあはせてみると、イエスを疑はずにはおられなかつた。主は偽善者ではないかといふ疑が最も強く胸にわいた。そう考へてみると益々彼に對する一つ一つの態度がはつきりしてくるのだつた。

「眞の愛をとき、人の子の罪惡を清めらる神の子であるなら、何故、己の罪を清めえないのだ！、何故、己を愛してくれないのだ。」

彼は他の弟子達があのやうに主を尊敬するのは結局だまされてゐるのにすぎないと言ふ氣がしてきた。もし、そうだとすればそれはあまりに悲惨な滑稽であつた。笑ふべき痛恨事であつた。その時こそユダが勝利を得るのだ。そして彼等弟子達を笑つてやるのだ。主をこの土地から無きものとして、人々を救つてやるのだ。

「だが然し。」ユダは又考へてみた。「あまりに己は自分自身を高く見つもりすぎてはゐないのか。己はやつぱり、いやしい弱い男にすぎないのではないか。そして主の愛をうくるにもたりない人間ではないのか。」

ユダは又淋しくなつた。心細くなつた。そして、自分を大きくみつもりすぎたのが恥かしいやうに感ぜられた。これだから自分は主の愛をうける價值がないのだ。と思つた。

然し、それならどうすれば自己を立派なものにすることが出来るかと言ふ問題になればユダには一寸もその方法が分らなかつた。この弱い性格を強くして誘惑に堪ることが第一だ。と思つてはみても果してどうして強くなるのか。生れかはらねばそれは

不可能なことであつた。唯一つその他に方法がある。それはイエスの愛である。唯愛のみが弱い人間を強くすることが出来る。ここまで考へてくると、ユダは再び主イエスを疑はざるをえなかつた。そのことにさへ氣のつかない救ひの主が、人を救ふことが出来るだろうか。愛を説きつゝも、すぐその足下にある愛にうえた人を救ひえない主。罪を清めるを名としつつも自分の弟子の罪すら清めえないでかへつて責める主。ユダには明かにキリストの偽善者たることが分つたやうに思はれた。

「皆の前で赤面した己は馬鹿だつた。何故男らしく反抗して、口には愛を説きつつも罪の子を清めえない主に反駁しなかつたか！」

ユダの兩手は耳をはなれて強くにぎりしめられてゐた。

復讐！

ユダはハッと我にかへつてとびおきた。あたりは靜寂そのもののやうな夜であつた。光をました星が木の間をもれて水面に浮んでゐた。

昂奮の後にともなふ疲勞が一時におこつてきてユダは再び腰を下した。水面に星が戯れてゐた。

ボトリ……、微かな音をたてて小さな黒いものが水面におちて、もがき苦しみつつバチャバチャと水をかいた。星がくだけて白波となつた。

蟲。

ユダはその名をしらなかつた。椰子の葉からおちたものにちがひなかつた。彼にはそれが何らかの不吉の前兆のやうに思はれた。

復讐。

彼の心にさつと閃いて射た光があつた。ユダはうめくやうにためいきをついて、兩手で頭をさへえた。

x

自分の態度を責める心と、辯解する心が互に衝突しつつすごした幾日かの悩みも、そのことをやつてのけた後は安堵にかはつた。ユダは重荷を下したやうな感じに満されて、のつそりと部屋へ入つて來た。

部屋には誰一人おなかつた。弟子たちのとりみだした態度を明らかに物語る器具が雜然とちらばつてゐた。ユダの顔には殘忍な満足の色がうかんだ。自分をいつものけものに取扱つた彼奴等があらはとりみだした態度を想像すると、ユダは一種の快感をおぼえた。更に彼を虐使して一分の愛もさずけなかつた偽善者イエスが、どんな風になるかを想像すると、彼の血管には痛快な血潮がのたうちまはつた。荒々しい數人の男にひきたてられてしばらくと去つたイエスの後姿が目にもえてきた。ユダは顔一ぱいに輕蔑の色をうかべて、それを口さきでふきとばすやうな身振りをした。

兩手はこの室に入つてきた時から、しつかり懷にあてられてゐた。着物にかかる黄金の重みを支えてゐる兩手は未だかつて經驗しないやうにふるえてゐた。一寸でも手をはなすとどこかへ飛んで失せるやうに感ぜられて胸部にさわるかたくりしい感じも忘れてしつかりおさへつけてゐた。

ユダはそれから足先で自分のものをあつめた。汚い着物一枚も残したくなかつた。けれど皆なあつめても小さな荷物一つにも足りないほどだつた。彼は小さな荷物を肩にかけて、新しい自由の世界——そこには愛と親しみがまつてゐる——へ旅だつ自分の姿を瞬間想つた。彼は足さきで荷をひとところにあつめた後、注意深くあたりを見まはした。勿論弟子たちが歸つてくるおそれはなかつた。附近幾軒の家々もおそらく、この前代未聞の出來事を見に出かけてゐて、犬の子一匹もないであらう。

ユダは恐ろしい程、氣味の悪い笑みをうかべ、そつと懷に手を入れた。さんぜんたる光輝が貪慾なユダの眼を射た。彼はあわてて再びそれを懷につきこんで、あたりを見まはした。もの音一つしなかつた。

彼は兩手でしつかり黄金をつかんで兩足をぐいと左右にふみはつた。

いちまーい

にまーい

さんまーい

ユダは注意深く數へていった。

よまーい

ごまーい

.....

ユダはしばらくすると心のおちつきをえた。そして今數へてゐる黄金が明かに自分のものであつて、誰のものでもないとはつきり感じた。彼はしばらく數へるのをやめた。彼はこの今まで取扱つたことのない大金が自分のものであると自覺すると共にどうしてこの大金を得るに至つたかといふことも靜かに反省することが出來た。

主を賣つた。イエスを賣つた。

その代金がこの黄金。

ユダは何とも形容しがたい不安に似た感じが心に芽ばえるのを感じた。それは彼の態度に對する力強い反抗のやうに思はれた自分の慾心に對する良心の挑戦のやうに思はれた。彼はこの感じをぐつとおさへつけた。

「とにかく自分は正しいことをやつたのだ、正當な復讐をやつたのだ。」こう強いて考へて芽ばえる感じを一つの妄想としてしりぞけるやうに努めた。

ユダは芽をつんだと思つた。と、後からもつと新しい力強い芽が伸びてきた。彼は又それをつんだ。すると次には前よりも大きい芽が反撥的に伸びてきた。つんでもつんでも芽は無くならないで、かへつて成長してきた。ユダは自分の心の臆病を聲高く笑つた。ひきつつたやうな空虚な笑聲がびつくりするほど大きく部屋をゆるがせた。彼は水を浴びたやうに戰慄をおぼえて、無茶苦茶に自分の態度を肯定して、再び數へはじめた。彼は幾枚まで數へたかもう忘れてゐた。

うちまーい

にまーい

さんまーい

よまーい

……

數へてゆく中にたえられない戰慄が全身をおほうて額からは冷かな汗が玉をなして流れた。心臓が力強く壓迫されるやうに息ぐるしく、ドキンドキンと破裂しさうな音をたてた。

それでもユダは一處懸命に數へつづけた。

眼が眞暗になつて頭はフラフラとした。

二十九まい

彼はたほれさうになつてやつと叫んだ。

三十まい

まさに三十枚であつた。黄金三十枚、

ユダはヨロヨロとたほれつつ、いきなり兩手にした黄金を地上に力強くなげつけた。非常な音がして金色が四方に散つた。

「僅か、僅か。……僅か。」

ユダの眼からとめどもなく涙が流れた。

「僅か。僅か。三十枚。」彼はたえいるやうに泣きくずれた。

「三十まい。三十まい。——」とぎれとぎれの苦しい叫びが僅かに彼の口からもれた。兩眼からふき出る涙は鼻といはず口といはず一面に洗つた。彼は無暗に兩手を顔におしあててかきまはした。三十枚の黄金が少ないからではなかつた。僅か兩手にもちうるだけの黄金で尊い人の生命を賣つた自分があさましく感ぜられたからである。

「己は人の生命を賣つた！」

おゝ！

わが主キリストを賣つた！

僅か——僅か——三十まいで。

ユダは泣けるだけ泣いた。

大聲をあげて泣いた。

温和そのもののやうな主イエスの顔が窓から聲をかけた。否、そこには閉された窓からにぶい光がもれてゐるにすぎなかつた。

「光の子。光の子。我が父、太陽の子。」

ユダはどんなにか、自分が主をわたすまで悩み苦しんだかを思つた。主に接吻し彼等に會圖するまで、唯ひたおしにある力強いものに壓倒されながら夢中に行動したことを思つてみた。然しそれは今の場合彼の行爲に對する何の言ひわけにもならなかつた。

ゲツセマネの祈りにおけるキリストの態度の從容たる様、すべて豫知し、すべてを運命にまかせたイエスの深さ、大さ。

ユダには初めてイエスの偉大なることが痛切に感ぜられた。……そのことは、他の如何なる感情も壓倒しつくす力をもつてゐた。つまらない疑など、この場合は何の價值ももたなかつた。決定的にイエスの偉大なることを知り、同時に、自分の小なることを知ることが出来た。

「主はきつと自分のさもしい心を知つておられたに違ひない。あの從容たる様は、確に前もつてすべてを豫知し、すべてをあきらめた偉人のみが出来たる態度である。おそらく主は——」

ユダはここで言葉をきつてしまつた。彼の眼前には、死を前にしたイエスがうかんだ。

「主は死をもつて自分を救つて下さつたのだ！」

ユダは自分が愛に相當しない身でありながら主の愛の足らないのをうらんだことが、たえいりたいほど恥かしかつた。自分は悪いことをのみ犯しながら他人からは善人と呼ばれたいと思ふ位馬鹿なことがどこにあらう、否

それよりユダの場合は、もつと不合理であることがはつきり意識された。憂せられる爲には少くとも、その愛のとどく高きまでは向上しなければならぬ。それはユダにとつて大きな一つの發見であつた。ユダには眞實の愛がどんなものであるか、おぼろげにも體驗せられた。

「己は主を賣つた！」

ユダは頭の髪をやけにかきむしり、つ絶望の叫びをあげた。泣きはれたまぶたからいつまでも涙がほとばしつた。やがてユダは放心したもののやうにヨロヨロと部屋を出ていつた。

×

×

朝の光が泉の椰子に祝福をあたへた。

水くみにゆく一人の女が泉の靜寂を破つた。

それから數分の後その女は膝まづきつつしきりに祈りをさへげてゐた。

被女の眼前には、自らの首へ繩をかけた一人の男があつた。

朝の太陽が土色になつて彼の顔を照しだした。

その男はキリスト十二人の弟子中の一人イスカリオテのユダにちがひなかつた。

これは木村毅氏の著書から暗示をうけて書いたものです